

# 城崎文芸館所蔵齋藤崎庵関係資料にみる齋藤崎庵の交友関係

山口 奈々絵

## はじめに

城崎文芸館が所蔵する齋藤崎庵関係資料一式（一七七点、以下この一式を「本資料」と称す）は、齋藤崎庵の生家である伊勢屋旅館の三子孫が平成一七年に同館に寄贈したもので、令和六年度夏期に当館が開催した企画展「齋藤崎庵―城崎の画家が夢見たユートピア―」にて出品された。筆者はこの企画展を担当したが、同展開催時点では調査が不十分であったため数点を個別に解説するにとどまり、本資料全体の意義を具体的に示すことができなかった。本稿ではこれを紹介することで、齋藤崎庵の交友関係について、わずかなではあるが追加情報を提示したい。

## 一、齋藤崎庵について

まずは齋藤崎庵（一八〇五〜八三）の生涯について、本稿に関わる事柄を中心に述べる。崎庵は城崎の伊勢屋旅館に生まれ、名は淳（醇）、字は仲淳（仲醇）といった。幼いころに耳を患ったことがきっかけで詩や画に心を寄せるようになったといい、城崎に湯治に訪れた梅辻春樵に詩を学んだ。画の方は、

自著『崎庵翁薄游漫載』（一九一三年刊）に自ら述べるところによると、弱冠にして京都の中林竹洞に学んだという。ただし竹洞周辺をはじめ京都における崎庵の足跡を示す資料はほとんどない。画業の初期は「奇菴」の号を用いたが、四〇代頃から「崎庵」の号を用いるようになる。現存作品により、「奇菴」と号する時期、つまり四〇代以前に四国へ遊歴したこと、先述の『崎庵翁薄游漫載』等により、嘉永六〜安政五年（一八五三〜五八、崎庵四九〜五四歳）頃に九州へ遊歴したことが判明する。帰郷後は地元である但馬や、隣接する丹後にて寺院の障壁画等を制作した。明治を迎え、七一歳で東京へ拠点を移し、『青緑耶馬溪真景図』（皇居三の丸尚蔵館蔵）を皇室に献上するなど、七九歳で没するまで精力的に活動した。その墓は東京の谷中墓地にあり、次男であり画家の齋藤民次郎（号秉堂）の墓が傍らにあったという<sup>①</sup>。一方、崎庵の生家である城崎の伊勢屋は、終戦後まで旅館業を続けたが、現在はすでに閉業している。

崎庵の交友関係については、広瀬淡窓、鉄翁祖門、三浦梧門、江馬天江、広瀬旭莊、草場佩川、大沼枕山、小野湖山、薄井小蓮といった同時代の著名人の名が崎庵没後の諸文献にて挙げられているものの<sup>②</sup>、交流した時期や親交の深さは不詳である。

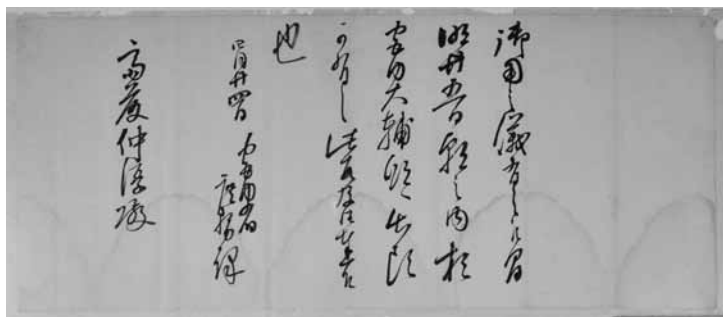


図1 【34】 宮内省庶務課達（明二十五日出頭されたきにつき）

## 二、本資料の来歴と内容

本資料は伊勢屋旅館のご子孫から城崎文芸館に寄贈されたものだが、それまで同家に伝わってきたのではなく、東京の崎庵の子孫とみられる家から送られたものであるという。

その内訳は、作者の特定に至らなかったものも含め、本稿末尾のリストにまとめたとおりである。なお筆者が調査した時点で、封入もしくは巻き取りのかたちで一二点のまとまりに分かれていたため、調査した順にこの分類を①～⑫の数字で表し、さらに各分類のなかで上から順に1～の数字を割り振った（リスト上の「旧分類」）。ただしこの時点で、この分類は当初の状態から若干の移動があったとみられるため、この番号とは別に通し番号を付した。本稿では以下、リスト上の資料に言及する際は「1」内に通し番号を記載する。

その内容を大別すると、A. 崎庵自身が書いた詩書、B. 崎庵以外の人物が書き、かつ崎庵自身が収集したとみられる詩箋、画箋や通達、C. 崎庵没後に新しく加わったとみられる詩書や書簡に分類できる。Aは表装する前の状態の詩書などで、印章を押していない未完成の作品も含まれる。Bには主に崎庵への為書きのある詩箋や崎庵と同時代の文化人たちの詩箋が含まれる。また宮内省庶務課が崎庵に宛てた通達【34】（図1）が特筆される。これは先述の《青緑耶馬溪真景図》（皇居三の丸尚蔵館蔵）の献上に関わると

考えられる資料である<sup>3)</sup>。これらの内容とその伝来状況から、本資料は、崎庵自身が若年から老年にかけて収集し、手元に置いていたものが主体となり、その没後、伝来の過程でCが加わったものと考えられる。

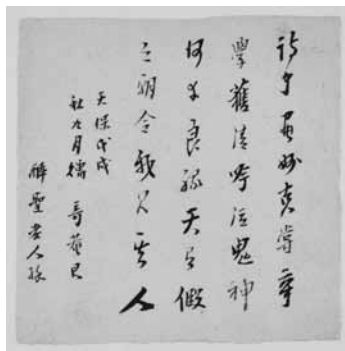


図2 【7】 今田元亮 詩箋



図3 【9】 今田元亮 詩箋

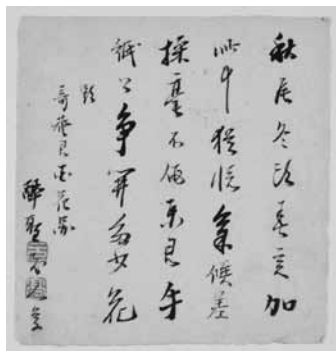


図4 【18】 今田元亮 詩箋

## 三、齋藤崎庵の交友関係

ここからは主にBの「崎庵以外の人物が書き、かつ崎庵自身が収集したとみられる」資料によって明らかにする崎庵の交友関係を紹介したい。

### （1）讃岐・淡路の人びととの交流

まず三点の詩箋【7】（図2）、【9】（図3）、【18】（図4）が含まれるのは、讃岐の人、今田元亮（一八四〇）である。田面村（現香川県さぬき市大川町）の庄屋・多田家に生まれ、医学を志して長崎に遊歴し、帰郷後、西讃の垂水村で塩田業、酒造業を営む今田家の婿養子となった人物で、晩年の文芸作品に「酔聖老人」という雅号を用いた。天保五年（一八三四）頃、病にかかり、天保一年（一八四〇）に没した<sup>4)</sup>。

三点の元亮の詩箋のうち【18】には天保九年（一八三八、崎庵三四歳）九月の

年記があり、また年記のない【7】、【9】も、元亮の没年を考えると、同じ頃のものと思われる。【7】や【9】の詩の題「題奇菴君做十竹齋群花図」「題奇菴君百花図」からは、奇庵が草花の図を描き、これ対して元亮が詩を詠んだことがわかる。長崎に遊学した経験を持つ先達との交流は、その後の奇庵の九州遊歴に際して有力な情報をもたらしたであろう。



図5 【25】河野杏村 詩箋

また奇庵は淡路の人びとも交流した。河野杏村（一八一〜七七）は淡路の生まれで名を逸といい、生涯の大半は淡路で過ごしたが、万延元年（一八六〇）には大阪で漢学塾を開いておよそ一〇年にわたり同地で文化人と交流した人物である。<sup>5)</sup>

図6 【63】河野杏村 詩箋

杏村による【25】（図5）、【63】（図6）はともに詩の題に「奇菴」と記されるため、奇庵が四〇代以前の頃の作とみられる。【63】の「以自凝島鹹土贈但馬画伯齋藤奇菴君附以此詩」という詩の題によれば、杏村は日本神話において神々が最初に作った島とされる自凝島の鹹土（淡路島の塩分を含んだ土か）にこの詩を添えて奇庵に贈ったよう



図7 【2】橋本晩翠 詩箋

である。淡路の人としては、ほかに【2】（図7）を書いた橋本晩翠（一八一〜八七）が挙げられる。洲本に生まれ、同地の儒者・中田南洋に学び、天保二年（一八四一）に大阪に移って塾を開いた人物で、安政三年（一八五〇）には徳島藩の儒官となった。<sup>6)</sup>

ところで、淡路での奇庵の活動を語るうえで欠かせない作品として『稲田氏西莊図』（個人蔵）がある。これは「奇菴」と号する時期の作品で、淡路を治めていた阿波藩筆頭家老・稲田氏の別荘（のちの郷学・益習館）で催された宴に同席した奇庵が、音楽と酒を伴う宴会のようすを画と詩で表して稲田翁庵（一五代当主植誠とされるが不詳）に贈ったものである。<sup>7)</sup> 奇庵がいかように稲田氏の知遇を得たのかは不明であるが、【2】【25】【63】は、このような淡路における奇庵の足跡にさらなる広がりを与える資料として注目される。

## （2）佐賀の人びととの交流

奇庵は、嘉永六く安政五年（一八五三〜五八、奇庵四九〜五四歳）のおよそ六年間にわたり九州各地を渡り歩いてきたが、そのうち佐賀を訪れた時期は、【46】（図8）によって判明する。【46-1】の作者である萩の児玉真準については不詳であるが、その詩の題に「戊午晩春佐嘉客中邂逅奇庵齋藤先醒」とあることから、佐賀滞在は九州遊歴の終盤、安政五年（一八五八）三月頃である。なお【46】は二人分の詩箋を横並びに貼り付けたもので、左右端に綴じ穴が並ぶことから、中央で折って冊子にしていたとみられる。さら

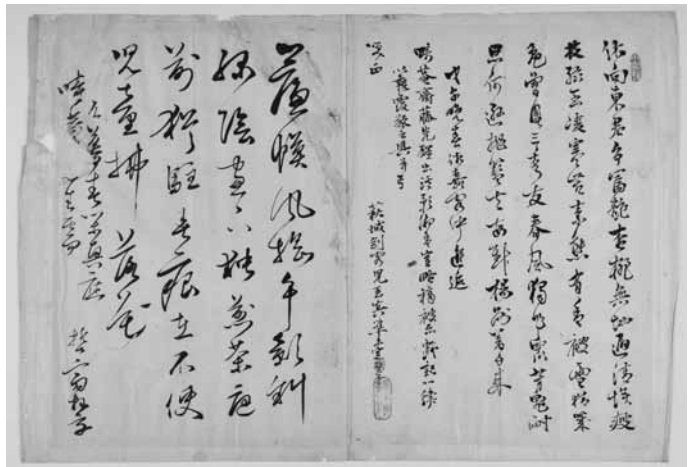


図8 【46】詩箋（右が【46-1】児玉真準）

に【35】【45】【59】【60】はこれと同様の形態で各詩箋および全体の分量も近いことから、これらの詩箋は一連のものとして作られた可能性が高い。詩箋の作者に佐賀ゆかりの人びとが含まれることもその傍証となろう。

たとえば【60-1】（図9）の作者・大園梅屋（一八六五）は名を惟精といい、白石鍋島家の家臣の家に生まれ、佐賀藩の儒者・井内南涯に学んで国学教諭に抜擢され佐賀

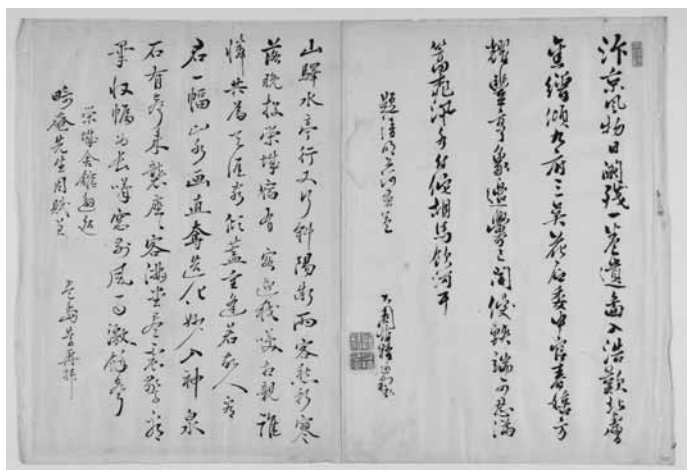


図9 【60】詩箋（右が【60-1】大園梅屋、左が【60-2】豊島篤次）

に移った人物で、詩を能くした。また【45-1】、【60-2】の作者・豊島篤次（一八三〇〜九七）は信濃の人であるが、幼い時から学問を好み、片眼、痘瘡の痕を理由にいじめられたことに発奮して二二歳で諸国に遊学、ついに九州に至り肥後の木下信太郎、肥前の草場佩川のもとで学んだという経歴を持つ。【60-2】は、「栄城舎館邂逅崎庵先生因賦呈」という題によれば佐賀城（栄城）の城下で崎庵に出会ったときのもので、詩の内容は、旅館で一緒になった崎庵の山水画を見、その際の感嘆を詠じたものである。また【45-1】は「題画」とあり、この崎庵の山水画に題した詩とみられる。

また佐賀の儒学者・草場佩川（一七八七〜一八六七）と崎庵の交流は、諸文献にて言及されるところであるが、【52】【53】はまさしく佩川と崎庵の間に直接的な面識があったことを示す資料である。佩川は佐賀藩校・弘道館で古賀穀堂に学び、また長崎で画を学んだ人物で、文化八年（一八一二）には古賀精里の随員として対馬に赴き朝鮮通信使と交流し、天保六年（一八三五）には弘道館の教職に就任して人材を育成するかたわら、八一歳で死去するまで膨大な漢詩を作った。【53】（図10）は佩川が崎庵に贈った詩である。題に付けられた割注によると、佩川は当初、崎庵の出身地である但馬を対馬と聞き違い、自らも赴任した経験のある対馬に関する詩を詠じたが、この度はこの勘違いを謝罪して詠んだ詩であるという。また【52】（図11）によれば佩川は好生館にて崎庵をもてなしたようだ。好生館は安政五年（一八五八）に

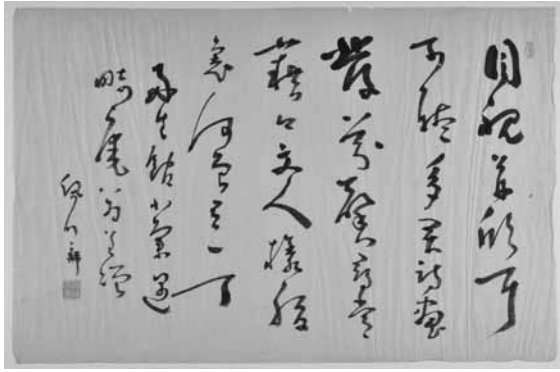


図11 【52】草場佩川 詩箋

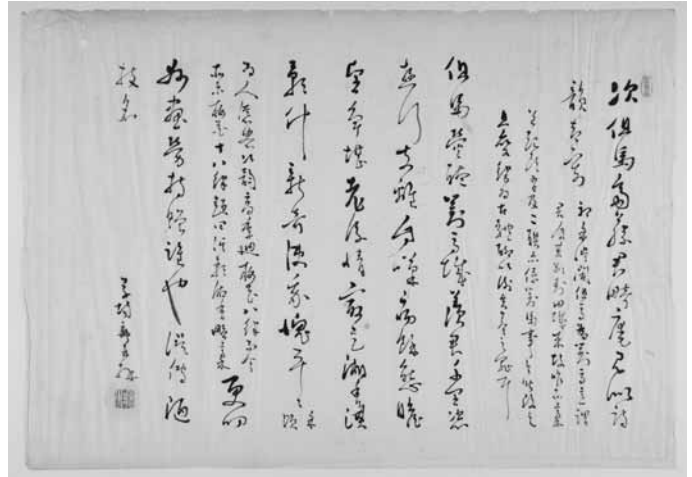


図10 【53】草場佩川 詩箋

医学寮が改称されて成立した佐賀藩の医学所である<sup>⑪</sup>。畸庵がなぜ医学所でもてなされたのかは不明であるが、先に触れた大園梅屋によれば、次に挙げる河野鉄兜もまた好生館にて迎えられたことがある<sup>⑫</sup>。

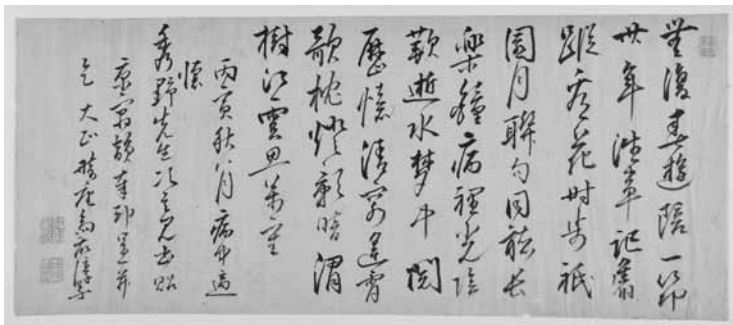


図14 【55】齋藤崎庵 詩箋



図13 印「白賁」  
〔31〕部分



図12 【31】河野鉄兜 詩箋

### (3) 播磨の人びとの交流

播磨の人びとの交流については、河野鉄兜、股野藍田に関する資料が挙げられる。

河野鉄兜（一八二五〜六七）は、播磨国揖東郡網干町（現姫路市網干区）の儒医の家に生まれ、のちに林田藩校敬業館の教授となった人物である。鉄兜のほか秀野などと号した。畸庵の西游に先立つ嘉永七年（一八五四）に中国・九州地方をめぐつたが、このとき鉄兜が佐賀で交流した人びとのなかには、草場佩川、大園梅屋のように佐賀で畸庵に詩箋を贈った人物も含まれ<sup>⑬</sup>、両者の交友圏の重なりが注目される。

鉄兜による【31】（図12）は「菊花宴図」と題する詩であるが、この鉄兜の詩箋に、畸庵が五〇代半ば頃から七〇代に入るまで使用した印「白賁」（朱文長方印）（図13）が押されており、両者の関係を考えるうえで興味深い。また【55】（図14）は、畸庵による作品で、題に「丙寅秋八月病中懷秀野先生」とあることから、鉄兜を思つて詠んだ詩であることがわかる。慶応二年（一八六六）、畸庵六二歳の作品

だが、詩の内容は三〇年ほど前に京都で鉄兜とともに祇園の月を見、長樂寺の鐘を聞いたことを病の床で振り返ったものである。鉄兜は畸庵よりも二〇歳年下であり、その年齢を考えると「三〇年前」には修辞が含まれる可能性もあるが、畸庵が三〇代の頃、両者の交流が始まっていたようだ。

次に龍野藩出身の股野藍田（一八三八〜一九二二）は、明治以降、帝室博物館総長、宮中顧問官などを務めた。「畸庵」という号が耳の病に由来すると述べるなど、畸庵の耳の障害について証言を残している点でも重要な人物である。<sup>14</sup>【66】（図15）は明治三年（一八七〇）に藍田が畸庵に贈った詩である。藍田は、宮内大輔・杉孫七郎とともに、畸庵が宮内省の用命を受けられるように後援したとされるが、<sup>15</sup>両者の交際が、畸庵が東京に移住する明治八年（一八七五）以前に始まっていたということがわかる。畸庵の東京行ききの動機はつきりとはわからないが、<sup>16</sup>少なくとも畸庵が東京で活動の場を獲得していくにあたっては、藍田のように東京移住以前からの交友関係もひとつの後押しとなったようである。

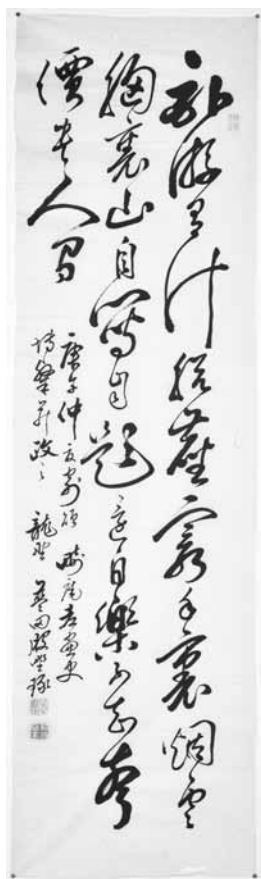


図15 【66】 股野藍田 マクリ

(4) 京都の人びととの関係



図16 【12】 山田梅東 詩箋

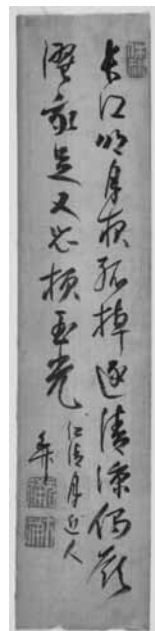


図17 【21】 山田梅東 詩箋



(右) 図18 【27】 宮原節菴 詩箋

(左) 図19 【26】 中村水竹 詩箋



先に河野鉄兜と畸庵の関係を示す資料として紹介した【55】は、京都で友人と過ごした日々を詠ったものであるが、ほかに畸庵と京都の関わりを示唆する資料が含まれる。これらには畸庵への為書きなどはないため、畸庵との直接的な交流の証とは必ずしも断言できないが、中林竹洞に画を学んだという時期に畸庵が収集した可能性がまずは考えられるだろう。たとえば【12】（図16）、【21】（図17）の山田梅東（一七九七〜一八七六）、【27】（図18）の宮原節菴（一八〇六〜八五）、【26】（図19）の中村水竹のように、『平安人物志』に掲載される人物などによる詩箋が挙げられる。

## おわりに

以上、城崎文芸館が所蔵する齋藤崎庵関係資料から判明する崎庵の交友関係を見てきた。崎庵の三〇代頃から晩年までの長い期間に渡り、また四国や九州など広い地域にまたがって崎庵の活動を伝える資料群である点は、画家本人が手元に置いていた資料ならではの特徴といえるだろう。

また作者の特定に至らずここで紹介していない資料のなかにも、崎庵の帰郷を見送る詩【43】や、詩画の礼に贈られた詩【51】、崎庵に山水画を求めた詩【64】など、崎庵と周囲の人びととの友好関係を想像させるものが多く含まれている。このような事実からは、幼くして耳を病んだことがきっかけで詩や画に心を寄せるようになったと語られる崎庵について、そうした言説から連想されるイメージとはやや異なる姿―旅先で出会った人びとと詩や画を介して積極的に親交を深めるようすが浮かび上がるのではないだろうか。

最後に、齋藤崎庵に関連する資料は依然として各地に存在しているとみられる。今後も彼の書簡や交流した人びとの証言等を広く探し求め、作品と資料の双方の視点から、齋藤崎庵の人と芸術を明らかにしていきたい。

(1) 結城素明「隠れたる明治初年の文人画家 齋藤崎庵の事ども」『塔影』一〇(二)、一九三四年)に述べられる。ただし結城素明『東京美術家墓所誌』(一九三六年)に記される区画には、令和四年現在、崎庵の墓石はすでに存在していないようであった。

(2) 結城蕃堂(琢)編『但馬城崎温泉案内記』(城崎温泉事務所、一九〇五年)、櫻井兒山「齋藤崎庵傳」(『筆之友』一五五、書道奨励協会、一九一三年)等。

(3) 詳しくは兵庫県立歴史博物館「齋藤崎庵―城崎の画家が夢見たユートピア―」展覧会図録(二〇二四年) 作品解説(出品番号八一)に記した。

(4) 大川町史編集委員会編『大川町史』一九七八年

(5) 多治比郁夫「大阪居住時代の河野杏村」『大阪史談』復刊第八冊、一九六六年

(6) 徳島の百人編集委員会編『徳島の百人』一九六八年

(7) 新見貫次「益習館の焼失と事変直後の洲本」阿波郷土会『庚午事変とその前後』一九六一年

(8) 中島吉郎「佐賀先哲叢話」一九〇二年。なお同著、水町義夫訳『佐賀先哲叢話』

(一九一三年)および同著、太田保一郎訳『佐賀先哲叢話』(一九四一年)も参照した。

(9) 福岡県八女郡編『稿本八女郡史』一九一七年(鶴久二郎編『稿本八女郡史 増補』一九七二年再刊)

(10) 佐賀県立博物館・多久市教育委員会『没後一五〇年 草場佩川 鬼才の遺産』展覧会図録、二〇一七年

(11) ただし天保五年(一八三四)に設立された佐賀藩の医学寮が「好生館」と改称されたのは、「好生館史」創立六十周年記念誌(一九五五年発行、『社会福祉施設史資料集成七』(日本図書センター、二〇一〇)所収)によれば安政五年(一八五八)二月二六日である。崎庵が佐賀で【46】等の詩箋を得たのはこれを遡る同年三月頃とみられるため、佩川訪問のみ時期が異なる可能性も考えられる。

(12) 河野鉄兜著、河野天瑞編『鉄兜遺稿附録』(一八九九年)に大園梅屋の詩が掲載される。その題に「林田越知君夢吉。拉令弟東馬君。過我藩云。將遊長崎。邀之好生館。吟酌終夕。東馬君有詩。次韻賦呈。」とあり、長崎に行く道中の鉄兜が好生館にて迎えられたことがわかる。

(13) 田村祐之「河野鉄兜の四国・中国旅行の旅程について―その再構成の試み―」『路獨協大外国語学部紀要』二七、二〇一四年

(14) 股野藍田『邀月楼存稿』(一九一九年)巻二所載の詩の題に「画師病聾。因号畸庵云。」とある。

(15) 前掲註1論文

(16) 畸庵の東京移住については、長男・哲太郎の東京師範学校入学も一因となった可能性がある。前掲註3『展覧会図録』八六頁。

謝辞

齋藤畸庵関係資料の調査に当たっては、伊勢屋旅館のご子孫の皆さまはじめ、城崎温泉観光協会の三好守様、城崎文芸館の職員の皆さまにご協力いただきました。また【55】および【66】の読解については、企画展「齋藤畸庵」開催にあたり、帝塚山学院大学名誉教授・福島理子先生よりご協力を賜りました。

なお本研究は、公益財団法人ポラ美術振興財団の助成事業による成果の一部です。



城崎文芸館所蔵 齋藤崎南関係資料一覧

旧分類 通番	筆者	落款	印章	内容	材質	法量	年代	備考
①								
1	1	木下伍郎	なし	鳥田大人宛書簡	紙本墨書	17.5×157.3	昭和5年 (1930)7月9日	
②	1	橋本晚翠	「孝之印」	七言絶句	紙本墨書	13.0×12.5		橋本晚翠(1812-87)：洲本生まれ。名は惟孝。洲本で中田南洋に学び、天保11年(1841)には大坂で塾を開く。のち徳島藩儒官となる。
2	3	蘭奇	「龍眞」	福寿草図	紙本墨画	12.8×12.5		
3	4	春湖	「聊以自娛」	雀図	紙本墨画	13.3×12.5		
4	5	東■	「茅海」	蘭図	紙本墨画	12.1×12.4		
5	6	蘆水	「芝水氏」	菊図	絹本墨画	7.7×7.5		
6	7	今田元亮	「元亮」	七言絶句「題奇菴君故十竹斎群花園」	紙本墨書	12.7×12.6		今田元亮(一1840)：讃岐の人。晩年、醉聖老人と号す。
7	8	青柳	「廣範」「■」	五言絶句	紙本墨書	27.0×14.8		
8	9	今田元亮	「元亮」	七言絶句「題奇菴君百花園」	紙本墨書	13.2×12.5		今田元亮：既出。
9	10	■	「■」	墨竹図	紙本墨画	12.6×12.5		
10	11	鳥羽晚影	「■」	田植え図	紙本墨画	11.4×9.8		
11	12	山田梅東	「某東」「■」	五言絶句	絹本墨書	13.6×13.5		山田梅東(1797-1876)：山城の人。名は敬直、字は其正。梅東などと号す。詩人、文人、儒家として『平安人物志』(文政5、13、天保9、嘉永9、慶応3年版)に掲載される。
12	13	梅山人	「厚友」	梅に蝶図	紙本淡彩	12.9×12.5		
13	14	桃林生	「桃林」	七言絶句	紙本墨書	12.4×12.3		
14	15	静■	「■■■■■」 (判断不能)	七言絶句	紙本墨書	12.3×12.5		
15	16	老風漁樵	「山色光水」	七言絶句「蓮鷹」	紙本墨書	16.5×11.0		
16	17	■	「謙堂」	七言絶句	紙本墨書	12.4×12.4		
17	18	今田元亮	なし	七言絶句「天保戌戌秋九月贈奇菴君」	紙本墨書	12.4×12.3	天保9年 (1838)9月	今田元亮：既出。
18	19	康燕	「燕印」	五言絶句	紙本墨書	13.4×12.3		
19	20	繡洲幾	「機子深」	七言絶句	紙本墨書	12.9×12.1		
20	21	山田梅東	「某東」「■」 「其正」	五言絶句	絹本墨書	13.7×13.3		山田梅東：既出。
21	22	大橋綿堂	「■晋」	七言絶句「咏竹」	紙本墨書	13.4×12.4		大橋綿堂(一1878)：名古屋の人。名は貞裕、綿堂と号す。天保12年(1841)京都へ出、医を学ぶ。慶応元年(1865)名古屋に帰る。

22	23	理	「條」「理」	七言絶句	紙本墨書	13.3×12.7	
23	24	巨溪林道	「渠」「籍」	七言絶句「花陰小酌」	紙本墨書	12.6×13.1	
24	25	河野杏村	「杏村」「■」	七言絶句「同奇笔况遊地■寸」	紙本墨書	12.9×12.5	河野杏村(1811-77)：淡路生まれ。名は逸といい、杏村、杏翁などと号した。万延元年(1860)大阪で漢学塾を開き文化人と交流した。
25	26	中村水竹	「元祥」「爾」	五言絶句	絹本墨書	18.0×4.0	中村水竹(1806-69)：京都の人。名は元祥、字は爾洋、水竹などと号す。篆刻家として『平安人物誌』(嘉永5、慶応3年版)に掲載される。
26	27	宮原節庵	(判読不能)	七言一句	絹本墨書	19.1×4.1	宮原節庵(1806-85)：尾道の豪商渡橋家に生まれる。名は龍、字は士淵、節庵と号した。頼山陽に師事し、のち昌平黌に学び、天保12年(1841)京都に塾を開く。儒家、詩人として『平安人物志』(嘉永5、慶応3年版)に掲載される。
27	28	東畊	「字印」「子」	五言絶句「漁夫」	紙本墨書	13.2×13.0	
28	29	湘江	「泰原得印」「■甫」	竹面賛	紙本墨画淡彩	12.3×12.6	
29	30	なし	「■■」	山水図	紙本墨画	12.6×12.1	
30	31	河野鉄兜	「白真」「越熊」「鉄兜」	五言絶句「菊花婁図」	紙本墨書	20.3×16.0	河野哲兜(1825-67)：網干の儒医の家に生まれる。名は維熊、字は夢吉、鉄兜、秀野などと号す。林田藩校敬業館の教授となる。
31	32	なし	「■溪」	七言絶句「過石州彈琴演」	紙本墨書	22.3×23.6	
32	33	大橋緯堂	「貞裕」	五言絶句「題画」	紙本墨書	13.3×12.4	大橋緯堂：既出。
34	34	1 宮内省庶務課 2 宮内省庶務課	なし	宮内省庶務課達(明二十五日出頭されたきにつき)および封筒 東京日新聞明治13年4月30日雑報の抜き書	紙本墨書	達17.7×41.9 封筒21.8×15.5	明治13年(1880)4月24日 抜き書きは、山田東洲(不詳)の父が東京日新聞4月30日雑報から抜粋した記事。
35	35	金岡蔚	「福■」「子■」	七言律詩「上巳采艾」	紙本墨書	25.8×18.0	法量は本紙。全体26.6×38.3。綴じ穴あり。
36	36	長■	「長堅之印」	書「乾々齋」	紙本墨書	23.5×56.2	
37	37	中井董堂	董堂敬義	七言二句	紙本墨書	100.5×29.3	中井董堂(1858-21)：江戸後期の書家。字は伯直、董堂などと号した。
38	38	齋藤崎庵	崎庵仲淳	なし	紙本墨書	129.0×60.1	
39	39	齋藤崎庵	崎庵居士	なし	紙本墨書	127.9×56.5	
40	40	齋藤崎庵	崎庵仲淳	なし	紙本墨書	131.4×60.4	
41	41	水野鐵鳴	鐵鳴字人	七言絶句「浪華城懐古」	紙本墨書	26.5×18.2	水野鐵鳴：東京の人。なお詩は『秘笈詩歌』(『水戸藩関係文書 第1』収録)所載の「浪華懐古」。
42	42	中澤雪城	雪城居士澤後卿	七言律詩	紙本墨書	22.9×24.0	中澤雪城(1810-66)：越後長岡に生まれる。書家。名は後卿。天保7年(1836)に江戸へ出て巻菱湖に書を学ぶ。
43	43	鐘川多田宣	「正■」(判読不能)	七言絶句「送崎庵君帰郷二首」	紙本墨書	29.9×30.5	鐘川多田宣(1844)12月
44	44	水石琢	「■字■已記」	七言絶句「午夢」	紙本墨書	27.5×29.6	台紙貼付。台紙は24.3×26.7。

5	1	豊島篤次	なし	七言絶句「題画」	紙本墨書	25.9×17.7			
	2	吉田蕉右	なし	七言絶句「録日製」	紙本墨書	25.5×17.6	豊島篤次(1830-97)：信濃の人。22歳で諸国に游学、九州で草場佩川に学ぶ。法量は各本紙。全体26.6×39.2。綴じ穴あり。		
6	1	萩城剣客児玉真達	「真■」	七言律詩「戊午晚春佐嘉客中邂逅崎庵藤先麗出津影相香室路綺被亦幟記一律以報覆瓶之具并写喚正」	紙本墨書	24.9×17.8	安政5年(1858)3月 法量は各本紙。全体26.6×39.1。綴じ穴あり。		
	2	哲斎	なし	七言絶句「■■■春閑興應崎口(損傷)生霏」	紙本墨書	25.7×17.0			
7	47	水野鐵鳴	鐵鳴水龍	「鉄鳴」	菅原道真遺愛の梅の画を画家たちに求める刷り物	紙本彩色摺	文久3年(1863)頃 水野鐵鳴：既出。鐵鳴の詩に「文久癸亥歳孟春」とあり。		
8	48	尼崎光謙	「釋光謙印」	七言律詩「贈北郭秀才」	紙本墨書	29.9×33.0			
9	49	天章	「天章」	七言律詩「偶作」	紙本墨書	22.5×27.0			
10	50	麗澤	「成■」「忠肝義膽」	五言排律詩「雜感奉贈崎庵藤先麗」	紙本墨書	25.7×29.8			
	51	長尾鳳翔カ 鳳翔	なし	五言排律詩「邂逅崎庵君々惠詩及面竹余乃次其高韻以詠」	紙本墨書	25.6×18.3	長尾鳳翔：佐賀藩儒・長尾東郭の孫。法量は本紙。全体26.7×39.4。綴じ穴あり。		
2	52	草場佩川	佩川■	「漁樵家風」	七言絶句「好生館北蘭遇崎庵翁呈贈」	紙本墨書	30.5×47.2	草場佩川(1787-1867)：肥前多久領主多久家の家臣の家に生まれる。名は華、佩川と号す。佐賀藩校・弘道館教授。	
3	53	草場佩川	草場■	「佩川」	七言律詩「次但馬藩藤君崎庵見似詩韻却寄」	紙本墨書	30.8×43.5	草場佩川：既出。	
4	54	齋藤崎庵	崎庵逸人	「仲淳式號息軒」「早知不入時人眼」	七言二句	紙本墨書	35.1×61.9		
5	55	齋藤崎庵	崎庵齋藤享	「仲靜之印」	七言律詩「丙寅秋八月橋中讓秀野先生次其見書船宗萬韻奉却呈并乞大正」	紙本墨書	18.9×44.2	慶應2年(1866)	
6	56	斐涯	「■■■■■」	七言排律詩「春日臥病」	紙本墨書	17.5×40.5			
7	57	志鶴	「島籠」「千里」	七言絶句「壬戌閏八月念夜崎菴藤子來訪見不消絶二篇發卒和答」	紙本墨書	20.9×9.9	文久2年(1862)8月		
8	58	源齋カ	「源秀信印」	七言排律詩「次崎菴老兄西遊篇雪韵以呈并乞字世叔」	紙本墨書	24.8×56.4			
9	59	1	武富把南カ	梧栖道人	「定保印信」	七言絶句「録書製」	紙本墨書	25.3×17.4	武富把南(1808-75)：名は定保、字は元謙、碧梧楼把南などと号す。弘道館で教鞭を執った。
	2	確雲傑	「局傑」「■」	七言絶句	紙本墨書	25.7×17.8	法量は各本紙。全体26.6×39.5。綴じ穴あり。		
10	60	1	大園梅屋	大園性精	「性精」「号梅屋」	七言律詩「題清明上河画卷」	紙本墨書	26.1×18.3	大園梅屋(-1865)：佐賀の白石鍋島家の家臣の家に生まれる。名は性精。
	2	豊島篤次	豊島篤	なし	七言排律詩「栄城舎館邂逅崎庵先生因賦呈」	紙本墨書	25.9×18.3	豊島篤次：既出。法量は各本紙。全体26.6×38.9。綴じ穴あり。	
⑦	61	鳳翁	「信義子節」	七言絶句「豊岡舟中」	紙本墨書	31.4×38.9			
⑧	62	齋藤崎庵	崎庵居士	なし	七言律詩「梅花十八律之一」	紙本墨書	129.1×38.9		

2	63	河野杏村	淡路河野逸	「杏柳」	七言排律詩「以自凝島織士贈伯馬面伯齋藤奇菴君附以此詩」	紙本墨書	31.5×45.6		河野杏村：既出。
3	64	麗澤松修		「成■」	七言排律詩「贈崎菴齋藤君求山水畫」	紙本墨書	25.7×50.4		
4	65	間鳳田■		「六合齋」「國華氏」	七言絶句「奇庵面伯早來訪忽々夜掃舊里賦之呈焉」、五言律詩「同前和瑤韻」	紙本墨書	31.3×34.5		分量は本紙。台紙33.4×37.3。
5	66	股野藍田	藍田股野琢	「号藍田」「■孫子玉」	七言絶句「庚子仲夏寄贈崎菴老圃史詩蔡并政之」	紙本墨書	114.5×32.1	明治3年(1870)	股野藍田(1838-1921)：龍野藩儒の家に生まれる。名は孫、字は子玉、藍田と号す。明治以降、帝室博物館総長、宮中顧問官などを務めた。
⑨	1	67	方■居士	「陀■■」	社図	紙本墨面淡彩	132.5×31.7	昭和7年(1932)春	
⑩	1	68	西野入曲川	八十三翁曲川六書 字士西公謙	「貞保苗裔」	書「仁者寿」	紙本墨書	35.0×68.1	西野入曲川(1836-1919)：信濃の北佐久郡の西野入家に生まれる。曲川、六書字士などと号す。書家。
2	69	乗如	南山前寺務七十三 老丹唾	「南山沙門」「乗如之印」	五言律詩「應齋藤氏雲録齋製以寄」	紙本墨書	134.5×30.1		乗如(1759-1835)：高野山金剛峯寺第38世座主。丹唾と号した。
3	70			なし	「大阿闍梨」「信壬印」	紙本墨書	130.0×29.9		
4	71		亀十老人	「■●■■■」	「亀十庵」	七言絶句「庚午春初之作」	紙本墨書	138.5×31.4	
5	72	齋藤崎庵	崎庵陳人淳	「仲淳弑号息軒」「号崎菴」	七言律詩「韓文公跋藍閑図」	紙本墨書	111.0×30.4		
6	73	齋藤崎庵	崎庵陳人	「仲淳弑号息軒」「早知不入時人眼」	七言律詩二首「秋柳五首之二」	紙本墨書	110.0×30.8		
7	74	齋藤崎庵	崎庵山人	「仲淳弑号息軒」「早知不入時人眼」	七言律詩「梅花十八律之一」	紙本墨書	109.0×30.8		
8	75		含章子	「容軒」「稻■」	書「寂亭」	紙本墨書	29.4×54.9		
⑪	1	76	稚次欣栄	なし	俳句拓本	紙本墨摺	96.5×45.4		
⑫	1	77	なし	「東寺執行之印」	天延二年二月勅詔拓本(羅生門変化退治)	紙本墨摺	45.9×62.8		